

これで身につく！ 感染症まるごとスタートダッシュ 感染症トライアングルと抗菌薬マップで全体像を一気につかむ

中西雅樹(編)

奈良医大教授・感染症内科学

笠原 敬

感染症の世界へようこそ

—まず最初に手に取る冒険の書

私は決して、最初から感染症が得意だった訳ではありません。むしろ研修医のころは微生物が苦手、名前は知っていても、そいつが一体どんな「ヤツ」なのか全くイメージできませんでした。「この菌にはこの薬」という断片的な暗記に頼り、ひどいときには「こういうシチュエーションではとりあえずこの抗菌薬」という、今思えば最も避けるべき処方をしていました。

そんな私を救ってくれたのは、ある製薬メーカーが配布していた薄い冊子でした。そこには、どんな状況でどんな菌が出やすく、その菌にどんな特徴があるのかが、ほんの少しだけ書いてありました。当時、そのささやかな情報にどれほど助けられたかわかりません。本書につづられている「感染症診療とは、そうした微生物の個性を見抜いて最適な対処法を選ぶ、人間観察ならぬ『菌観察』なのです」という一節を読み、当時の感覚が蘇りました。

編者の中西雅樹先生は、同じ関西の地で長年にわたり感染症診療や教育の普及に共に邁進してきた、大切な「仲間」です。そんな中西先生から本書をご恵贈いただき、ページをめくった瞬間に思わずうなりました。「ああ、これは僕も書きたかった(そして挫折した)構成の本だ!」と。

本書の最大の特徴は、「微生物・抗菌薬・臓器」の三者のつながりを立体的にとらえる「感染症トライアングル」という一貫したコンセプトです。まずは日々の臨床で、検査結果に出てきた「菌の名前」を入口に本書を開いてみてください。例えば黄色ブドウ球菌のページを引けば、そ

の「最凶のフルスペック」な性格と、それが狙う臓器、そして立ち向かうための武器が一目で把握できます。

最初から通読する必要はありません。目の前の患者さんから出た菌を「つまみ食い」するように調べていく。関連する抗菌薬や感染症のページも少し目を通してみる。少しでいいから線を引いたり、日付や思ったことを書き込んでみたりする。それを繰り返すうちに、バラバラだった知識が自分の中で自然と線になり、いつの間にか「この菌なら、あの臓器とこの薬だ」とトライアングルが頭に浮かぶようになるはずです。

「感染症診療は感覚ではなく論理だ!」

中西先生が説くこの論理を、楽しみながら身につけられるのが本書の醍醐味です。目の前の患者さん一人ひとりと向き合う際、漫然とやり過ごすのか、その都度この本を確認するのか。その小さな積み重ねが、皆さんの診療の質を劇的に変えてくれるでしょう。

本書は、感染症という広大な世界へ足を踏み入れる皆さんに贈る、最高の「冒険の書」です。最初の一步を確かな確信に変えていってくれる一冊として、自信を持って推薦します。



●B5/頁 240/2026 年
定価: 3,960 円
(本体 3,600 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-06282-4]
医学書院 刊